



金色の「岐阜楽市楽座図」の寄贈について

当金庫と(公財)ぎふしん記念財団は、岐阜市新庁舎の開庁を記念して、今年8月に同庁舎1階市民交流スペース「ミンナト」に箔画を寄贈しました。

作品 箔画「Landscape #50 - 岐阜楽市楽座図 -」 200 cm×500 cm
制作 箔画作家 野口琢郎 (京都市西陣)



■コンセプト - 発展する令和の岐阜市 -

約450年前、岐阜城を拠点に織田信長は、それまで「井ノ口」と呼ばれていたこの地を「岐阜」と改め、「楽市楽座」による商業発展・地域活性化を目指しました。また、天下統一と天下泰平を目指した織田信長は、当時の京都の賑いが描かれた「洛中洛外図屏風」(狩野永徳筆)を上杉謙信に贈り、この屏風は織田信長の志とともに国宝として現代に受け継がれています。

今回、制作した「岐阜楽市楽座図」もこの織田信長の志にあやかり、岐阜市を象徴する風物(岐阜城、岐阜市庁舎、金華山、長良川、ぎふ長良川鶴飼、花火大会など)と、岐阜市の賑わいを抽象化し、令和版「楽市楽座図」として金・銀・プラチナ箔で表現することで、令和の岐阜市の発展を後世に伝える作品としました。

■制作箔画の解説

野口琢郎氏は、京都西陣の箔屋野口(創業1877年)の五代目であり、代々受け継ぐ引箔の技法を縦横に駆使し、新たな美術表現へと昇華させた独自の箔画技術を編み出し、現在は箔画作家として国内外で活躍されています。漆の接着力によって画面全体に施された金・銀・プラチナ箔の輝きは、観る角度や光源により変化し、多様な美しさを感じさせてくれます。

この「岐阜楽市楽座図」は、岐阜市の街並みを上空から見下ろした構図で、金雲の隙間から覗く街並みには、岐阜市の名所の他、自動車、猫などの日常の営みも見つけることが出来ます。また、市街地に漂う金雲には、隠し絵として岐阜市の市章や武将紋があしらわれ、太古から濃尾平野を悠然と流れる長良川は、過去から現代に受け継がれる伝統の象徴として画面中央にダイナミックに表現されています。

この作品を多くの方々にご覧いただくことで、地域に対する愛着や誇りを一層高めていただき、市民の共通の財産として後世に伝えられることを願っています。